月報

No.４４４
２０１７年
５月

日本キリスト教団
茅　ヶ　崎　香　川　教　会
茅ヶ崎市香川1丁目 34－35
http://kagawachurch.jimdo.com/

説教 『 私たちの心に灯がともされる 』

（イースター礼拝）

ルカによる福音書 ２４章１３節～３５節　　　　小河信一 牧師

今、私たちは、イースターの朝を迎えました。そして、その朝と共に、墓からよみがえられた主イエス・キリストの出来事を記念する礼拝を守っているところです。

ところで、聖書には、イースターと同じ日の夕方にとても大切なことが起こったと語り伝えられています。それが、本日の聖書箇所として取り上げた「エマオ途上の物語」です。

イースターの朝の起こったのは、人間に対する圧倒的な神の愛と正義による出来事でした。そして同じ日に、人知れぬ街道と村で、直ちに神の救いの御業が成し遂げられました。

その際に救われた人間について、聖書は、特にテキスト前半において、「目が遮られていて」（ルカ 24:16）、「暗い顔をして」（24:17）、今はもはや望みなく（24:21「望みをかけていた」過去形！）、「物分かりが悪く、心が鈍く」（24:25）というように、否定的な様子あるいは心持ちを映し出しています。

主イエス・キリストの復活は、まことに神の出来事であったがゆえに、それは、あらゆる人を救い出す御業なのであります。そのような驚くべき救いの御業が、主の復活の朝に連接する、その夕べに起こったと、ここに報告されているのです。

幸いなことに、私たちの教会では、年３回、クリスマス・イースター・ペンテコステにおいて、教会学校の子どもたちがページェント礼拝を行っています。実は、そのページェントの中で、エマオ途上の物語は子どもたちによって演じられています。

この物語が演じられるのは、今日のお昼に行われるイースター・ページェントではなく、50 日後のペンテコステ・ページェントの冒頭において、です。私たちは、聖霊降臨日のページェント礼拝で、この物語を見て体験することができるのです。

なぜ、私たちの脚本では、聖霊降臨の前に（50 日前！を振り返って）、エマオ途上の物語が配置されているのかと言えば、主イエスの復活の力によって大転換された二人の歩み、一見頼りなさそうな二人の足取りが、教会設立に向かって直進していったからです。まさしく、片田舎での二人の回心の物語は、より大きな教会誕生の物語へとつながっています。

ルカ福音書 24:13-14――

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン（≒12km）離
れたエマオという村へ向かって歩きながら、14 この一切の出来事について話し合ってい
た。

クレオパ（ルカ 24:18）ともう一人の弟子が、非常に否定的（ネガティブ）な気持ちを抱え込み、今にも不信仰に陥ってしまいそうな谷蔭（たにかげ）を通り、道を下っていました。

詩編 141:1-2――

1 主よ、わたしはあなたを呼びます。
速やかにわたしに向かい
あなたを呼ぶ声に耳を傾けてください。
2 わたしの祈りを御前に立ち昇る香りとし
高く上げた手を
夕べの供え物としてお受けください。

「あなたを呼びます」・「あなたを呼ぶ」と二回繰り返されています。声を出して、神に呼びかけるということが強調されています。

ユダヤ人は、日の沈む夕方から、新しい一日が始まると考えていました。新たな一日を神にささげるという思いをもって、祈っていました。それが、家族と共なる、夕べの食前の祈りとなっていたのかもしれません。

詩編 141 全体を読むと、この詩人の心は決して穏やかではないことが分かります。「わたしの心が悪に傾くのを許さないでください」（:4）と叫んで、自分の罪と戦い、同時に、「支配者がことごとく岩の傍（かたわ）らに投げ落とされますように」（:6）と叫んで、悪を行う者らに巻き込まれないようにと祈り求めています。なかなか心が静まらない状況に置かれているからこそ、詩人は冒頭で、神による救いを願ったのです。

詩人は、まず「わたしはあなたを呼びます」から、わたしのそばに居てください、（讃美歌の歌詞で言えば）「主よ、ともに宿りませ」（Ｉ－39 番）と声を上げました。そして、詩人は貧しく乏（とぼ）しい人なのでしょうか、それとも、真実の捧げ物をわきまえ知っている人なのでしょうか、手を高く上げてささげた祈りを、「夕べの供え物としてお受けください」と、主に呼びかけました。

日が陰（かげ）る中、エルサレムから下っていたクレオパともう一人の弟子も本来ならば、神の喜ばれる夕べの祈りの時を、静かな祈りをもって始まる夕餉（ゆうげ）を、待ち望んでいたのではないでしょうか。クレオパを含めユダヤ人は、夕べの祈りをささげることが習慣となっていました（詩編 55:18、ダニエル書 6:11）。望みを失いかけていた二人の声にならない声を聞いて、彼らを守られるのは、人の祈りに答えられる神、「暗くなってゆく灯心（とうしん）を消すこと」のない主の僕（しもべ）・キリストなのです（イザヤ書 42:3）。

さて、先に引用したルカ福音書24:13-14「ちょうどこの日、二人の弟子が……歩きながら……話し合っていた」というこの物語の文章の冒頭には訳出されていませんが、「そして見よ」‘ Now behold ’という言葉があります。先行するルカ福音書24:1-12では、私たちに対し、主イエス・キリストの復活が明らかにされました。そして今、主の復活の栄光または復活の朝の輝きが、二人の弟子を照らし出そうとしています。それは、まさに闇を

貫く光であり、主イエスの十字架と復活の御業は、罪と死によって絶望しかけている人を救い出すものである、と告げています。「さあ、見てごらんなさい」、じっくりと、クレオパと無名の弟子を、影を背負った彼らを「見てごらんなさい」。あなたもまた、彼らのうちの一人ではありませんか、と問いかけられているかのようです。

ルカ福音書24:16――

しかし、二人の目は遮(さえぎ)られていて、イエスだとは分からなかった。

「目は遮られていて」というのは、身体的に、弟子が主イエスを目撃できなかったことだけではないでしょう。

「たとえイエスが我々と語られ、イエスが我々のごく近くにおられるということを我々が聞いていようとも、我々の心にもっとも困難なことがあるときには、我々もしばしばまったく同じ状況に陥ってしまう。」 K.バルト

未曾有の困難に出遭うならば、誰しも、肉の目も心の目も塞(ふさ)がれてしまいます。困難なことばかりに気が引かれて、目の前に主イエスがおられるのが「分からなかった」のです。

ルカ福音書24:21　二人の弟子の言葉――

「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。」

弟子のこの証言から、彼らが「目は遮(さえぎ)られていて」、「暗い顔をして立ち止まった」(24:17) ことの一つの原因が推察されます。すなわち、「望みをかけていました」と過去形で言い切っていることから、「今や、望みは絶え果てた」という彼らのあきらめや虚しさを読み取ることができます。確かに、過去には希望があったが、しかし、それはすでに過ぎ去ってしまったと言うのです。

ルカ福音書24:25――

そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍(にぶ)く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち」

今度は、主イエス直々(じきじき)に、クレオパたちの内面が見透(みす)かされています。ここでは、「イエスは言われた」という点が要(かなめ)です。なぜなら、主イエスご自身が「物分かりが悪く、心が鈍く」、「(預言などの御言葉)すべてを信じられない者」と出会い、受け止めてくださったからです。主イエスがクレオパたちに近づいて来られ、一緒に歩きながら語り合い、そうして、彼らの弱さやつまずきを捉えて、愛をもって叱責(しっせき)された、ここが一つの転換点となりました。

「心が鈍(にぶ)い」という言葉の原意は、「心が**遅い**」です。つまり、明快に預言者がメシア預言をした、その神の言葉に対し、弟子たちの心の動きは「遅い」、ゆっくりゆっくりとしか働かないというのです。主イエスご自身が、彼らの否定的(ネガティブ)な気持ちをすくい取ってくださいました。主イエスがいつの間にか、自分たちの道連れになっていてくださり、ゆっくりゆっくりと自分たちと歩き続けてくださる……そこから、弟子たちは、心の鈍(にぶ)さや顔の暗さをもみ消そうとするのではなく、否定的(ネガティブ)なものの一切を、その根源にある罪を、主イエスにゆだねる人生を歩み始めたのです。

よみがえりの日の貴重な時間、主イエスは、霊が吹き巡って魂の動きの俊敏な人たち…

…例えばマグダラのマリアのような人（ヨハネ 20:16,18）……だけに関わろうとされたのではありません。何かにこだわり、粘り着くほどに「心が鈍い」人たち、のろすぎる歩みの人たち、その緩慢（かんまん）さの中に、主イエスは入って来られました。

一方で、「主は死んでしまった」（ルカ 24:20-21）、他方で、「墓には遺体が見当たらず、どうなったのか」（ルカ 24:22-24）……弟子たちの心は引き裂かれるかのようでした。心が鈍くなってしまったのも、無理はありません。しかし、弟子たちの否定的（ネガティブ）な様子あるいは心持ちを映し出すエマオ途上の物語の初めから、よみがえられた主イエス・キリストは、二人の弟子の同伴者でありました（ルカ 24:15）。主イエスは、自分たちの尺度や考え方にがんじがらめになっている者たちに、そっと寄り添われました。

ルカ福音書 24:28-29――

[28] 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。[29] 二人が、「**一緒に**お泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは**共に**泊まるため家に入られた。

旅人同士の出会いで終わるのではなく、主イエスと**一緒に・共に「泊まる・とどまる」**（参照：ルカ 19:5 ザアカイへの主イエスの呼びかけ）というところが、エマオとエルサレムとの往還、その旅の真骨頂なのだと、ここに明示されています。

ヨハネ福音書 1:38-39――

[38] イエスは振り返り、彼ら（アンデレともう一人）が従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ――『先生』という意味――どこに泊まっておられるのですか」と言うと、[39] イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。

主イエスはここで、アンデレたちの「イエスと泊まりたい。イエスと一緒にいたい」という願い求めを受け容れられました。主イエスは「（自分のところに）来なさい」と、彼らを招かれました。アンデレもクレオパも、主イエスと一緒にいる生活へ、共に泊まり共に旅する人生へ、真実に主の弟子となるように召されたのです。夕べの食卓において必ず、空いた席、すなわち、その場に臨在されるキリストのための席を用意するような人もおられますが、そのような主イエスと共なる生活がここから始まったのです。

エマオ途上の物語において、弟子たちの否定的（ネガティブ）な様子が変えられていく、その霊的な源泉として、大きく二つのことが挙げられています。

ルカ福音書 24:32――

二人は、「（彼が＝イエスが）道で話しておられるとき、また（彼が）聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

第一は、聖書の説き明かしです。ルカ福音書 24:27,32,45、いずれの箇所においても、「聖書」‘ the Scriptures ’は複数形ですから、主イエスは聖書のもろもろの文書・箇所を説明してくださったということになります。その中には、前主日、棕櫚の日に読んだ聖書箇所「財布と袋と剣（つるぎ）」（ルカ 22:35-38）にあった旧約引用も含まれているでしょう。イザヤ書 53:12（〃ルカ 22:37）に拠（よ）れば、主の僕（しもべ）は「罪人のひとりに数えられ」、十字架につ

けられる、**だがしかし**、その苦難によって執り成しの業が成し遂げられると、告知されています。確かに、その聖書の預言は成就しました……イエス・キリストは「背(そむ)いた者のために執り成しをした」（イザヤ書 53:12）、言い換えれば、父なる神とその子どもである人間が顔と顔を合わせるように再会させてくださった、自らを犠牲にして神と人との関係を回復してくださいました。

「聖書を説明してくださったとき」‘ while He <u>opened</u> the Scriptures to us ’という句の中で、「説明した」というのは単純にも「開いた」が原意です（他にルカ 4:17）。つまり、主イエスによって聖書が開かれると、そこから御言葉が輝き出(い)でるということです。主イエスが「聖書を開いた」というのは、一挙手一投足の中でも注視すべきことです。主イエスが聖書を開いてくださったならば、そこに聖霊の働きが生じ、それを読む、または、聞く私たちにも御言葉を受け止める力・忍耐が与えられるのです。

本日の説教題は、『私たちの心に灯(ひ)がともされる』です。これは、弟子たちの「わたしたちの心は燃えていたではないか」という回想文に基づいて付けたものです。直訳すると、「私たちの心は 私たちの内に 灯(ひ)をともされていた（燃やされていた）ではないか」です。受動態で、主役は、イエス・キリスト、灯(ひ)をともしたお方であることは明白です。

このように、暗い面持ちをしていた弟子たちの心に灯(ひ)がともされたのは、主イエスが聖書を開いてくださり、彼らの遮(さえぎ)られていた目が「開かれた」（ルカ 24:31 受動態）からです。すなわち、主イエスが、神の御言葉により大いなる救いの計画と成就を説き明かしたときに、弟子たちの実際の目と心の目が開かれたということです。その出来事によって、弟子たちが信仰者として人生を歩む道が切り開かれ、彼らの前に、エマオからエルサレムへ戻る道が昭示されたのです。

ここで、旧約学者、C.ヴェスターマンの説き明かしを引用しましょう。

> 父から私の娘へ——
>
> この世の中に、私たちの心に、火を点(てん)じる多くの火があるし、どれもこれもほとんどみな良いものばかりです。
>
> しかし、大きな喜びの火を点じるのは、ここでエマオの弟子たちが言っているような火だけだと思うのです。
>
> 心に火を点じるような火というのは、まさに……主イエス・キリストの十字架と復活、永遠の生命のもとにある（引用者注）……永遠の光に照らされているものなのです。

クレオパともう一人の弟子は、主イエス・キリストによって神に立ち帰らせていただきました。

エマオからエルサレムへ立ち戻るということ自体が、まさに神に対する悔い改めをあらわしています。弟子たちが神に立ち帰るきっかけ・力は、キリストの接近・同伴、聖書の説き明かし、そして、キリストが主人である食事でした。そこで私たちに求められているのは、神に御力に従うこと、ただ悔い改めをもって、主の食卓にあずかること……これが、否定的(ネガティブ)なものに取り巻かれていた弟子たちを変化させていった、第二の霊的な源泉です。

ルカ福音書 24:30――

一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。

私たちは、礼拝の中の聖餐式によって、このエマオの村での夕べの食事、そして、主の晩餐（ルカ 22:19）ならびに「五千人に食べ物を与える」給食（ルカ 9:15-16）の恵みにあずからせていただいいております。その聖餐において、主イエスが、命のパンを分かち与えたこと、十字架につけられることを神の御心とされたこと、そして、よみがえりの力を弱く乏しい者に現されたことを、想起し信じるのです。

最後に、教会学校の子どもたちが来たるペンテコステ・ページェント礼拝でエマオ途上の物語を演じます。また、今は少し控え目な活動になっておりますが、私たちの教会にはエマオの会があります。聖書の「エマオ途上の物語」から、私たちの慰めとなる讃美歌、絵画、詩などがつくり出されてきました。エール（声援）を送るというわけではありませんが、一つの文章を引用して、説教を終わります。

F.B.クラドックによる聖書注解より――

（パンの裂かれた）食卓に、イエス・キリストが存在したということは、すべての信仰者を、第一世代のキリスト者にするのであり、また、あらゆる場所をエマオにするのである。

幸いなるかな、エマオへ下り、ある家に宿り、そしてエルサレムへ引き返す旅が、私たちの教会において引き継がれていることは！　天の国は近づいた。いざ、進まん！

茅ヶ崎香川教会月報
No.４４４
２０１７年5月２８日発行
編集発行：日本キリスト教団
茅ケ崎香川教会
発行責任者：小河信一
編集責任者：波木井奈津子